2期生（法学部　法律学科）

鈴木　夢

猪突猛進

01 生まれと育ち

自然の中で、想いのままに。

私が生まれ育った場所は、自然に囲まれた大地、北海道です。

両親は農業を営んでおり、私はいつもその手伝いをして過ごしてきました。仕事を手伝っているとき以外は、川に行ったり山に行ったりして遊んでいる日々。

夜は澄んだ空を見上げ、星を眺める日々。

都会のように、行きたいところにすぐに行ける交通手段もなければ、遊べる場所もないような田舎。欲しいものあっても、すぐに手に入らない。自然以外、何もありませんでした。

しかし、だからこそ、欲しいものは自分で作ろうと思ったり、自然の中で手に入るもので何かをしようと考えたりすることが多くありました。お金を払えばいくらでも手に入るということより、今、身の回りにあるもので何ができるだろうと考えを巡らせる。人の目を気にすることなく、想いのままに動き回れることが楽しくて仕方がなかった田舎での暮らしでした。

02 大学生になってからのこと

新しい言語から

大学入学時に選択する第二言語で、私は中国語を選択し、私は中国語にはまりました。初めは、新しい言語を学ぶということに、「面白そう」「難しいかな」と楽しみな気持ちと、不安な気持ちが入り混じっていました。実際に授業が始まってみると、難しいということより、面白いという想いが勝っていました。

その面白さというのは、まず、中国語の「音」です。日本語とは全く違う発音の仕方であり、とても新鮮でした。次に、日本語以外の言語が分かることで、他の国の人と話せる機会が増えたこともあります。自分が話す言葉は完璧ではありませんし、まだまだ習得には至っていませんが、少しでもわかっていると話をするきっかけができるということに気が付いたのです。中国語を学んでいるということから、実際に中国人と話すきっかけが出来、日本人ではなくても「言語」という共通の話題から話し始めることができたのです。

1年生の終わりには、北京へ3週間の語学実習に行きました。そこでは言語だけでなく、中国という国の生活を身もって経験することができました。その中で衝撃的だった出来事は、町中の公衆トイレに入ったことです。そこは、トイレとトイレの仕切りはあるものの、仕切りの高さは低く、しゃがんでも隣の人の顔が見えるほど。ドアはなく通路側を正面に入る形でした。日本にはない生活が他の国では当たり前なことなのだと、実感しました。

日本に帰って来て中国人と話してみると、中国人の留学生は、日本の伝統的な文化にとても興味を持ち研究をしていたり、他の国の学生が勉強熱心だったり、日本の文化との違いを体験的に知れたりして、自分は今までいかに身の回りのものを見過ごしてきたのだろうと感じました。日本語との、また、日本の文化との違いを楽しみながら他の言語を習得していきたいと思った出来事でした。

03 長期有給インターンシップ

観察と実行

私はインターンシップで、「あることをする時、その場の雰囲気・そこにいる人を〝観察〟することが、それを成し遂げるための第一歩であり、その後自分が〝どのように〟行動するかが重要である」ということを学びました。

今回、私は、株式会社オンワード樫山のany FAMという女性向けブランドでショップ店員として働かせていただきました。インターンシップでの業務は接客です。

その中で、「自分がどう動いたらいいのか分からない」「自分のやっていることは相手にとってもいいと言えるものなのか」と思うように接客をこなせないという壁がありました。しかし、そのまま同じように過ごしていても何も変わらないと思い、まずは周りのスタッフがどのように動いているのか観察するようなりました。そうすると、1つはお客様の目線に立っていること、2つ目に自分以外のスタッフの動きを見て自身が行動しているということが大きなポイントにあることが分かりました。そこには、個人ができたらいいこと以外に、チームとしてどのように動くのかが軸として考えられていると感じています。そのことを自分も意識するようになってからは、接客もスムーズにできるようになっていきました。

新しく始めることでも、そうでないことでも、まずは観察すること、そしてその観察をもとに自分はどうするのかということを考え計画立て、実行に移すことが重要なのだと感じました。

04 大事にしたいこと

「なぜ」という疑問を持つということ。

集団で何かを成し遂げようとするときはもちろん、自分自身の問いかけがこれからの人生を決めることに大きな意味を持つのではないかと考えています。日々過ごしている環境、人との関わり、自分がしていることやしたいこと。なぜ、それがあるのか、なぜそれをするのか。全てには意味がありました。その意味をしっかりと理解できるよう、「なぜ」という問いかけを続けていきたいです。

05 これからのこと

自分の進む道

これまで、私は何かを決めるとき、「好きだから」「面白そうだから」という感情で動いてきました。

中学校では、絵を描くことが好きだから美術部に入り、高校では、本が好きだからと図書局に入り、高校卒業時には、京都の街並みが好きだからと京都の大学を選択し京都に住むことを決めました。

これから、就職活動をする中で沢山の選択に迫られると思います。まずは、これまで経験してきた北海道での暮らしや中国での数週間、4カ月のインターンシップで学んだこと、その他の沢山の経験を振り返り自分が本当にしたいことを見つけたいと思っています。もちろん、それまでのように「好き」や「面白い」という気持ちから選択することも自分の中では大切だと思っています。

自分の気持ちにも、「なぜ」そう思うのかを問うことで、本当に進みたい道を決められるはずです。　自分一人だけではなく、これまで一緒に過ごしてきた家族のこともしっかりと考え、向き合って、自分の進む道を決めていきたいです。

13歳　突然の別れ。
中学1年生の冬、事故で父を亡くした。また、そのことがきっかけで、引っ越すことを決める。

16歳　札幌の高校と先生との出会い。
札幌の高校に通い、担任の先生との出会いをきっかけに弁論部に入部することに。

19歳　ヨットとの出会い。
京都に移り住み、大学に入学。新入生歓迎会でヨット部に出会う。

先輩・後輩からのメッセージ

有瀧恵里（1期生）

周りの人を優しく包み込んでくれる雰囲気を持つ一方で、ぶれない軸を秘め、最後までやりきる強さを持っている夢ちゃん。状況に合わせ自身の役割を変えられる、そんな存在。

小林万純（3期生）

ある深夜。私の前に天使が舞い降りた。プレゼン作成に行き詰まり手が止まってる。そんな時、隣で支えてくれた人。誰よりも人の気持ちになれ行動できる。それが鈴木夢さん。

プロフィール

1995年4月25日生まれ。北海道浦河町出身。
三人兄妹の末っ子。趣味は美術館巡り。
現在は京都産業大学の法学部、体育会系ヨット部に所属。
大学1年生の時に、むすびわざコーオッププログラム担当の東田晋三教授に出会い、むすびわざコーオッププログラムを受講することに。
プログラムとの両立のため、ヨット部では選手からマネージャーへ。